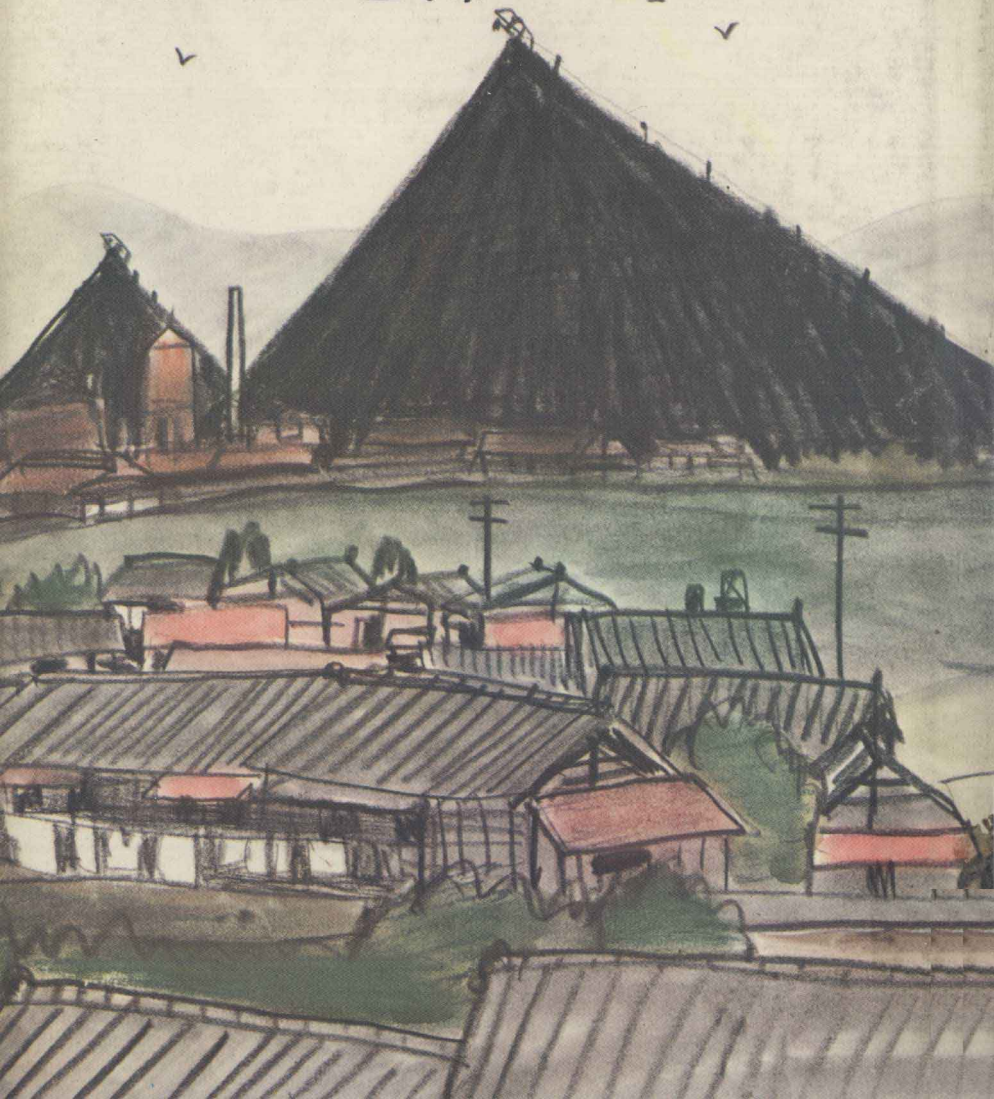
ボタ山の四季

閉山地帯に生きる

香月金之輔



ふゞ山の四季

閉山地帯に生きる

香月金之輔

講談社

NDC 914　19.4cm

ボタ山の四季

定価　五〇〇円

昭和46年3月3日　第1刷発行

著者　香月金之輔

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2―12―21
郵便番号112
電話　東京九四二―二二(大代表)
振替口座東京三九三〇

印刷所　信毎書籍印刷株式会社

製本所　大製株式会社

★落丁本・乱丁本はおとりかえします

© KINNOSUKE KATSUKI 1971　PRINTED IN JAPAN

0095-166805-2253 (0)　(学2)

目次

鉱山の疼き

豆飯 7
腫れもの 9
首のタオル 11
鉱害部落 16
十八人のなかの一人について 19
形見 22
夜も昼も 24
俳句独言 27
ボタ山の四季 33
〃ヤマ〃の灯 37
閉山 41

日雇十年

デモ仲間 45
雲の墓標 48

道 53
風の入らない家 57
安保日記 62
平和への祈り 67
Mさんのはがきより 69
十二月生まれ 72
現場小屋の芽吹くころ 73
流木拾い 77
汗 79
ピン 81
野菊と議事録 84
ビキニ忌 87
芽吹く島 91
授業参観日 94
洗礼 96
日雇十年 103

母、妻、子……

母の詩 107
母の掌、髪 109
薬掘る 110
投薬口で 114
花冷え 118
おしろいの花 121
妊り峠 123
吾子誕生 127
愛誦歌 137
あじさい 139
七夕の夜 142
妻の誕生日 144
夕焼け 146
父の死 149
あんま 153
姉の死 158

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

妻泣く 131
保育園の崖 134
結婚式を終わって 162
土性骨 166

四季の対話

竹二題 171
ピッポー列車と雲雀 174
遊廓堤の見える坂 177
月見草の見える晩 183
遠賀川 185
花火 188
杭になる 192
露草の歌 194
ジャンパーの匂い 195
かぶと虫 198
雨期明け近し 201
大学坂のある町 203
風や木の唄 206
曇った日 209
小学校のポプラ 210
田植えどき 216
夕焼け松 218

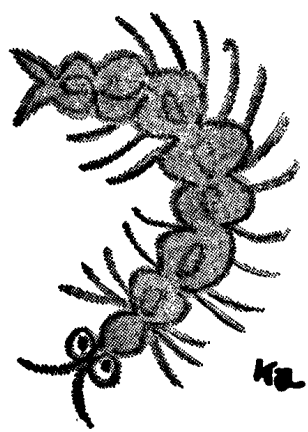
涙痕

文章について 223
〃うた〃のはじまり 224
文化の芽 227
受賞前後 229
涙痕 232
女と萩 235

色紙の前で　238
『黒い流域』余聞　243
掌のひらの海　246
吾子育つ　251
少年期　254
胸若い木馬たち　257
朝の言葉　258
基地の唄　259
団交、デモ　260
闘いの唄　261
スト余聞　263
蝶を呼ぶ工衣　264
あとがき　266

装丁・風間　完

鉱山の疼き



豆　飯

トウ豆や、グリンピースが採れるころ、職場の仲間がよく豆飯を炊いてくる。わたしにも食べるよう、ときには勧められるが、わたしは豆飯だけはどうも嫌い……というより食べても少しもうまいという気がしない。

わたしの家庭では、母が食べ物の苦情を言うのを許さなかった。わたしが玉ネギ、人参を嫌いだと言って食べなかったら、わたしがそのお菜を食べるまで他のお菜を出してくれなかった。おかげで今ではなんでも食べる。――でもやはり豆飯（赤飯も然り）と名がついたものは、現在でもどうも、のどにつっかえたようで喜んで食べる気にならない。

豆飯は夜、電灯を消して食べるのがいちばんよい。芳しい匂いがいっそう強まり、静かな雰囲気が拡まる。螢光灯の下でにぎやかに食べる豆飯は、その香も失せよう。第一、その香を充分満喫することができないだろう。

父が木屋瀬町（八幡区）から直方に出てきて、晩年、再び失業し、母が一人で新入の炭坑のガラ焼きに働いていたころ――。わたしは、まだ西尾にある（この辺は大昔、海の入り江だったという）国民学校に行っていた。弟と妹は小学校――。

そんなある晩、わたしたちの家には電灯がつかなかった。一ヵ月以上も電灯料を滞納したので、電気会社から人が来て、電源を切っていったのだ。水道料は三ヵ月以上払わないとうちきられるが、電気は、すぐ切られる。母は、こんなに働いても、まだ苦労しなきゃならんと思ったのか、少し、父にブツブツ文句いってコボしていた。

「灯が消えたような寂しさ」とよく人は言うが、灯が消えて真っ暗になるということは、お互いの箸の上げおろしも見えず、闇の中で、お互いの息づかいと、豆飯の香がツンツン鼻にくる。

穴ぐらの子熊のように、眼を凝らし、鼻で嗅いで、わたしたち兄妹は、豆飯を食べたものである。飯の中のトウ豆は虫食いで、噛むとジャリッと音がして、虫がつぶれることさえあった。四歳年上の姉は嫁いでいて、わたしには、なおさらこの姉のいないのがさびしかった。婚約者は南方で戦死し、新しく結婚した夫は炭坑水没（中鶴坑）でなくし、不幸つづきの姉ではあったが、このときは、旦那さんもまだ災害にあわず、幸福な家庭であった。優しい姉であった。この姉を除いて、家族は全部そろっていた。ロウソクの灯がゆらゆらゆれて、お互いの顔、影が長くなったり、短くなったり、わたしたち家族の心の揺れのようにロウソクの灯も無言で暗かった。

この晩の豆飯のように、ジーンと鼻に迫る強い香は、もう二度と嗅げまいが、わたしの長男には絶対に知ってもらいたくない香である。

豆飯が仇ではあるまいに、好き嫌いのほとんどないわたしが豆飯を好きでないということは、わたしの「嗜好」の問題というより、やはり、肌で植えつけられた感情の問題だろうか。そんなことにいつまでもこだわっているわけではなく、そんな遠い日のことはもう過ぎたというのに……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

腫れもの

梅雨のボタ山のように、ぶよぶよになっている、そいつ。火がつくような痛みで、いきなり、わたしに襲いかかったそいつ。そいつを、わたしは初めっから憎んでいた。沈澱した沼のような鉱員風呂から這いあがったそいつは、知らぬまに、わたしの肉体の一部を冒し、以来、二十年あまり、そいつとわたしの縁は切れない。

ほこりっぽい春が過ぎて、夏時分になると、とくにそいつは野放図な姿をあらわす。今晩も、そいつを封じ込めるための手当てを妻にしてもらっているが、火のつくようにキリキリと痛む。この痛みこそ、わたしが〝ヤマ〟で働き出した最初の痛みである。

みなさんのなかには、鉱員風呂に入られた経験をおもちの方もあると思うが、炭鉱には、職員風呂と鉱員風呂がある。職員風呂の方は少しせまいが、比較的に清潔だった。それにくらべ鉱員風呂は、会社の待遇をそのまま物語っているようだった。

金気のプンプンする水をどんどん流しても、底に炭塵まみれの泥がたまる。もちろん、よく見ていると、ロクに足も洗わないで、そのままズブリと身を沈めてくる鉱夫もいる。そんな中で、わたしは顔を洗ったりしていた。ぬるぬるする泥の感触に、もう鉱員風呂には入るまいと思った

が、翌日には、その決心どおりにはいかず、ズルズル鉱員風呂に通ってしまう。鉱員風呂を利用すれば、それだけ風呂賃が助かったので、わたしは、仕事の帰りには、ここを利用した。

風呂場には、街と同様、番台があって、風呂銭のかわりに、木札を受けとるおばさんがいた。このおばさんは、〝ヤマ〟がつぶれて、数年前までは失対で働いていたが、いまは姿も見ない。きっと、もう歳でやめたんだろう。ずいぶん白髪のあったのを記憶している。

さて、わたしは何の話をするつもりだったか。ああそうだ。わたしを、しつこく苦しめつづけてきた、お尻の腫れもののことだった。そいつがはじめて顔を出したときは、少しあわてた。なんだかわけがわからず、炭坑入り口にある近くの小さな診療所に走った。そして、そこの先生は、いとも簡単にメスを当て、血膿とともにそいつを追い出してしまった。そいつが、これで完全に追いだされたわけでなかったのを思い知らされたのは、それからわずか二ヵ月たらず後のことであった。

そいつが顔を出すたびに、わたしはお尻を切らねばならなかった。切っても切っても、そいつは消えなかった。出たのは、貧しい、わたしの血と情けなさであった。

それ以来、ときたま、そいつは思い出したように顔を出す。元来風呂好きでもないわたしが、少しでも不潔にすると、そいつは警告を発する。

一九七〇年五月二十六日の夜、つまりたった今も、妻は、「あなたのお尻も困ったものネ！浮気したんじゃない？」などと、冗談を言いながら、膏薬を患部に貼ってくれている。〈冗談じゃない〉わたしは這いつくばって、「いや、これは肉体の若戸大橋さ」と笑いながらも、一方

では、内心、これは消されていった鉱山の数々のうずきに相違ないと思った。

首のタオル

鉱山では、所長をはじめ、だれでも首にタオルを巻いている。首のタオルは〝ヤマの男〟たちの象徴である。入社後、わたしも、すぐこのことをおぼえた。

外気に喉をふれさせないことは喉の抵抗力を弱めることになるかもしれないが、汚れやすい直方の町では、これはシャツの襟の汚れをかくすのに便利だった。

直方の町は明けても暮れても、どす黒い空であつた。砂で漉した鉄分の多い水で、舌がよれるやうであつた。大正町の馬屋と云ふ木賃宿に落ちついたのが七月。父達は相変らず、私を宿に置きつぱなしにすると、荷車を借りて、メリヤス類、足袋、新モス、腹巻、さういつた物を行李のまゝのせて、母が後押しで炭坑や、陶器製造所へ行商に行つてゐた。……私はハッラッとしてゐた。一ヶ月ばかり勤めてゐた。粟おこし工場の廿三銭也にさよならをすると、私は父が仕入れて来た、ヒネ物の扇子を鼠色の風呂敷に背負つて、遠賀川を渡り隧道を越して、炭坑の社宅や、坑夫小屋に行商して歩いた。炭坑には、色々な行商人が這入り込んでゐた。

烈々とした空の下には、掘りかへつた土が口を開けて、ゴロゴロ……雷のやうに遠くではトロッコの

流れる音が聞える。昼食時になると、蟻の塔のやうに材木を組みわたした、坑道口から、泡のやうに湧いて出る坑夫達を待つて、扇子を売りに歩いた。坑夫達の汗はリンリとした、水ではなく、黒い飴である、今、自分達が掘りかへした石炭土の上に、ゴロリと横になると、バクバクまるで金魚のやうに空を食つた。

（林芙美子『放浪記』より）

林芙美子は、直方の町をこのように書いている。

今も昔も、直方の町はたいして変わりもせず、相変わらず汽車の黒煙で煤けていた。

煤煙の町の十年の天の川

町では首のタオルはおかしかろうが、〃ヤマ〃では公然とできた。

タオルの白いのをしているのは〃ヤマ〃の上司クラスで、一般鉱員のタオルは、炭塵でいつも汚れていた。わたしは、幸い坑内仕事ではないので、白いタオルのままでいることができた。

白いタオルを首に巻いて、石炭事務所、本社などに連絡に行った。白いタオルを首に巻いたまま本社に現われたわたしは、すぐ若社長の目にとまったらしい。もどったら注意された。本社から、すぐ鉱業所に電話で注意があったという。

その次は、社長に対しての態度が悪いと、三ヵ月後に注意された。これも電話である。たかが、とるに足らぬ連絡員のわたしごときに、わざわざ二度も電話してくる本社の神経質さに、いささかうんざりした。

次長から注意された主任が、今度は、わたしをさっそく呼びつける。順送りの、主任の叱言を

受けながら、わたしには、もうひとり別のわたしが、声にはならないが――挨拶のしかたが悪いなんて、そんなことがあるものか。こちらは社長を見れば、チャンと頭を下げていたのに……――そういっていた。

もっとも本社の人たち、とくに受付の社員なんかは、社長がもどってくると、パッと飛び出してきて、うやうやしく、黒塗りの乗用車のドアをあけて、深く腰を折っていた。わたしには、とてもあんなにまではできない。社長も人間なら、おれも人間。裸になれば、どこに違いがあるものか……と、内心、力んでいた。そんな心の態度が、ひょっとすると、社長の目に「不遜」に映ったのであろうか。

正直で気が小さいくせに、その半面、一徹なところが、わたしに潜んでいた。父に似たのだろうか。

首のタオルは、本社に行ったらはずさねばならなかったが、鉱業所では、所長、次長並みに白いタオルを、わたしはおおっぴらに巻いていた。

本社と鉱業所では、気分的にも大分ちがうところがあった。

ウダるような真夏でも、キチンとネクタイをしめていなければならない本社勤めよりも、鉱業所の連絡員の方が、よほど気楽でよいとわたしは思った。給料は安いが……。

坑内から汚れてあがってくる鉱夫の首に巻かれたその汗のタオルが、後にはわたしにも、社長や重役たちの高価なネクタイよりもずっと尊いものに思えた。鉱夫たちの汗で光るタオルは、地下で授けられた名もない勲章である。

ビラ入れ

ひんやりとした空気が、わたしと彼を包む
わたしと　彼の頭上に……
柿の木が一本　枝を広げている
見上げると　人魂(ひとだま)のように
あかあかと
満月が燃えている

死んだ鉱夫の笑いのように
あかあかと燃ゆる満月

かろうじて生き残った　ぼくらに残されたもの……それは闇
墨絵のように広がる畑……そしてボタ山
炭住の灯が　ひとつひとつ消え
流木が眠る頃……

わたしたちは　ここ閉山地帯の、どまん中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com